

# 中央アフリカ共和国の旅 (4)

～悩みと喜びと～

小村 幸二郎

## ンデレへの道

想い出多いクランペルの町に別れる日がとうとうきた。2月27日の日曜日 東の空がようやく白みはじめる5時30分起床。同行の連中は いつもよりはかなり早く起きたらしく ランプの灯を頼りに すでに 出発準備に余念がなかった。出発は7時の予定である。しかし 例の通り挨拶廻りやら何やらで遅れて 結局 宿舎を離れるころには 9時になっていた。これから北辺の町ンデレへの移動である(第1図)。手首の痛みはかなり薄らいではいるが 相変らず下痢が続き 歩くことさえ億劫な痔の痛みに耐えて これから 337km の自動車旅行をするのかと思うと いささか気が滅入る。クランペルからンデレへ向うばあいには ングイヤを経由してバラキテに出れば近道ではあるが この荒れた道路を走る苦労を考えれば 国道8号線に出た方がはるかに楽である。クランペルから一度南下して国道8号線に入り 東へ向った。これから先は野生動物のやや多い地域であると聞かされていたが 真昼間に広い道路へのこのこと出てくる動物はやはり少ないのだろう 猿さえも姿を見せてはくれない。

アニミストの多い国だが この付近にはキリスト教徒が多いらしく 沿道の教会には熱心な信者が溢れ 瞳を輝やかせて説教に耳を傾ける人たちの姿には 例えようもない美しさがあり そして 自然現象を含めたすべてのものに魂があるという いわば 超非現実的とさえ思えるアニミズムに疑問を抱き より現実的な信仰を受け容れようとする姿勢がうかがわれる。こうした信仰の

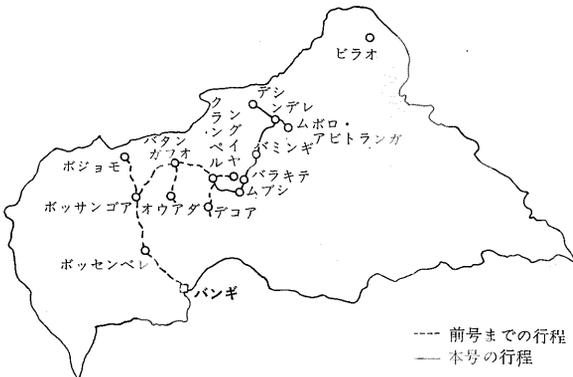
あり方の転換は おそらく 自然のままに生きることができた過去の社会と 自然を己の手で改革しようとする近代の社会と決して無縁ではなからう。左手に剣を握り 右手にゴラーンをかかげて改宗を迫ったとさえいわれるアラブの力と要求とに屈することのなかったこの国の人々を思うとき 己の心の寄りどころを己で選ぶ強さと 宗教に対する真剣な姿勢 そしてまた 生きるにはあまりにも苛酷な自然の支配下に興り そして 広まっていたイスラーム教が 自然に恵まれた社会に生きる人々の心を魅了しきれない何かをもっていることが感じられる。イスラームという言葉は「平和であること」を意味し その聖典として知られているゴラーンの中には 人の道が矛盾なく説かれている。

このようなイスラームの意味だけからみても イスラーム教は 当然 多くの人に容易に受け容れられてよさそうなものだが 現実はそのようではない。その理由を一口にいえば 多分 その教えがあまりにもきびしすぎるということになるのかもしれない。灼熱の砂漠に祈り30日間の断食に服し 飲物や食物を制限されるこの教は 自由というよりは むしろ 乱れた社会でわがままに生きる人にとっては 苦痛以外の何ものでもなからう。しかし 耐えることを拒否し また それから逃避しようとする人は どんな社会に身をおいても 所詮は 敗者として生きざるをえない。

クランペルから 106km 離れたムブレに到着したのは 10時35分であった。地図の上ではわびしげな町かと思われたが 実際は 結構にぎやかな町である(第2図)。

小休止の時間を利用して 郡長さんに挨拶することにした。クランペルの郡長さんがこの郡長を兼務しておられるのですでに顔なじみではあるが 長い間お世話になり。しかも 再び逢うこともないと思われるので こうした旅の途中で時間を消費するのは惜しい気もするが これも大切な仕事の一つである。

郡長宅の庭に茂るマンゴの木陰で一休みしている折 高さ10mばかりのマンゴの木の中心部から 椰子の木がニューッと突出しているのを見かけた。誰かが継木をしたものにちがいないが 珍らしいというだけで あまり良い趣味ではない。すぐ近くで赤ん坊を遊ばせている



第1図 調査行程図

婦人に ゼスチャー入りで いろいろと質問を試みたがその婦人は はにかみながら笑うだけで 口をきいてはくれなかった。 もっとも 継木という意味のフランス語もサンゴ語も知らない私の質問が この控えめの婦人に 通じるわけがない。

この継木のほかに 私の目を楽しませてくれたのもう一つあった。 それは パンギを出発して以来これまでの 2,488km の旅行中 一度も見ることのなかった岩山である。 高さ50mばかりの結晶片岩の断崖の下に 萱葺きの家がぼつんと建っている(第3図)。 岩陰の所々に灌木がしがみつき 家のまわりに茂るマンゴの巨木の葉の隙間から プーゲンピリアの真紅の花がのぞいている。 若い頃?南画に手を出したことのある私は いつの間にか その風景の中に 一筋の滝と清流とをあしらっていた。

はじめて見る岩山の美しく そして きびしいとさえ思えるそのたたずまいを毀すのを恐れて 私は 遂にその岩に向かってハンマーを振えなかった。

11時にムブレを出発する。 東側に打続く高く峻しい岩山と西側に広がる密林との境を縫う道は悪く 車窓からはみ出した右腕は 強烈な光にさらされて 焼けるように暑い。

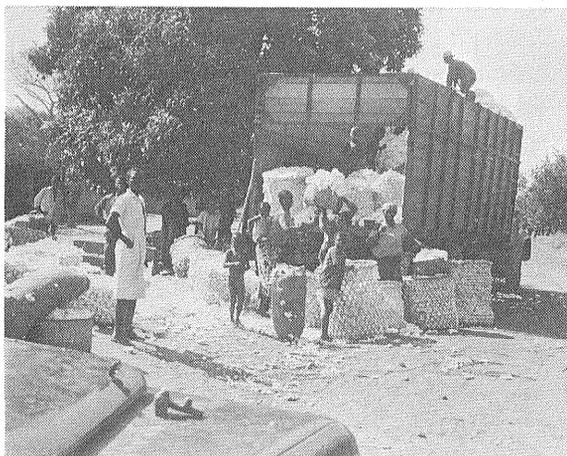
まるで石のように固くなったパンと水の昼食をとったのは ムブレの北方75kmに位置する検問所横の木陰であった。 赤と白に塗り分けられたバーが道を遮っているこの検問所は こんな奥地だけに必要なさそうだが 恐らく これから先が野生動物の密集地帯なので 密猟者の取締りと動物を監視するために設けられているのだろう。 検問所の裏手に 同じ形の白ペンキ塗りの小さな家が 4軒建っている。 これまでに見なれている部

落の家とはいささか形が異なり 窓も玄関も幾分垢抜けしているところをみると この検問所のお役人の官舎にちがいない。 一番近いムブレから遠く離れている上に 店もないここでの生活は いろんな意味で さぞかし大変なことだろう。 しかし 検問所のお役人も家族も 至って陽気である。

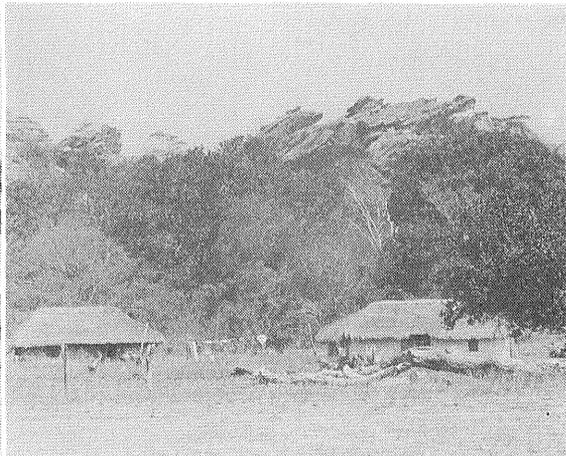
検問所を出発してわずか36kmの地点で 私が乗っていた車が クラッチの故障で 立往生した(第4図)。 後続車の到着を待って 早速修理にとりかかったが この修理がいつ終わるやら見当もつかない。 何しろ はれものにさわるようにして だましまし使っているおんぼろ車である。 灌木がつくる一つまみの陽陰に入って 枯葉に腰を下したとたん 無数の小蠅にたかられた。 蠅にはすっかり馴れてはいるつもりだが 突然にまつわりつかれると 無性に腹がたつ。 黄緑色の広く美しい葉をつけた木枝を燃やして 蠅を追払うことにした。 赤道アフリカのしかも一番暑い時刻に焚火をするとは正気の沙汰とも思えないが 防虫クリームをいくら塗っても 皮膚がひりひりするだけで さっぱり役に立たないので 虫除けにはこれが一番だ。 1時間半を費やして修理は終わった。

密林がサバンナに変わり パミンギ川を渡って 暑さもようやくしのぎやすくなった頃 平坦な道を突走っていた車が 突然 身を左右に激しくゆすりはじめた。 停車して調べてみると左後車輪のボルトが3本抜け落ちていた。

クランペルから 292km 北に当るこの付近にはアラブ系の人が多いのか みかける人たちの7割ぐらいは アラブ特有の衣服を着ている。 身体つきも幾分大柄で



第2図 ムブレでの綿の集荷



第3図 ムブレの背後に迫る先カンブリア時代の結晶片岩の崖と民家

赤銅色の肌にするどい眼つきの彫の深い顔はアブラそのものである。 はじめて見る日本人に興味を抱いてか通りがかりの人が 次々に 足を停めた。 私は はじめて逢った彼らに親近感を覚えて スーダン系にちがいない一人の老人に アラビア語で話しかけてみた。

「アツサラーム アレイクム イザイヤツク (今日はお元気ですか)」「カム オムラツク (お幾つですか) ?」「イスマツク エイヒ (お名前は) ?」「フエイン ベイタツク (お家はどちらですか) ?」

いろいろと質問してみたが その老人は 何一つ答へようとはしなかった。 ベドウインならば自分のテントの所在地を絶対に教えないこともあるが この老人のように部落に定住しているアラブ系の人は かなり雄弁なはずである。 私は 「この老人はアラビア語を話せないのではないかと ふと思って 今度は サンゴで語で話しかけてみた。

「バラオ モウ イイキ ンジョニイ(今日は お元気ですか) ?」「バラオ ミンギ メルスイ」「マラ テイ モウ アエキイ イエン (貴方は何族ですか)」「……」「モウ イイキ テネ ヤンガ テイ アラビイ ナ アンダレ (アラビア語や英語を話せますか) ?」「ノン」「ムベニイ ゴウ キイ ア ヤンガ アンダレ (英語のできる人がここに居ますか) ?」

老人に問いかける私に興味深げに見ていた一人の若者が 瞳を輝かせながら身を乗り出して 「ムビ イエキ テネ ニイ ケテケテ(私は少し話せます)」と 老

人に代って答えた。 しかし この若者は 私と同じように語学の才能が乏しいのか あるいは あまりにも才能がありすぎるのか 難かしい言葉を並べた。 彼の口から飛び出す英語?のうち 私には「How are you」「I smoke」「I can go」だけは辛うじて分ったが 「カムエル」「イツテズプレズ」がどうもよく分らない。

もともと 前の三つにしても即座に分ったわけではなく その都度「モウ イイキ ンジョニイ?」「モウ イエ テンヨウ マンガ」「モウ イエ タンボラ ビツグウエイ ナ コドロ (貴方は村へ帰るの)?」とその意味を確かめた上で 分った次第である。 しばらくして 「カムエル」「イツテズプレズ」の意味がどうやら分りかけ その若者に「ガスイ ナ ンドソウ」「パラドウ」と云ってみた。 そしてその若者は 俺の英語も満更じゃないといった顔付で にっこり笑った。「カムエル」は「Come here」「パラドウ」というサンゴ語は「どうぞ」という意味だから「イツテズプレズ」のプレズは「Please」で イツテズは「It is」らしい。 まったく変な言葉だが こうした言葉を聞き そして それを判じてみるのも 一つの勉強である。

立去ろうともしない老人に向って 試みに イスラーム教徒がお祈りの時に必らず口にする言葉を云ってみた。「アツラー アクバル ラー インラ イラハ インラアツラー ムハンマド ラー ソーラ アツラー (神は唯一無二 ムハンマドは神の使者なり)」と唱える私の声を聞いて げげんそうな顔をしていた老人が にっこりと笑った。 やっぱりアラビア語は通じた。 しかしこの老人が知っているアラビア語は これではじまるお祈りの言葉とゴラーンだけであろう。

5時45分 真紅の太陽はバミンギ・バンゴランの森に沈みはじめた。 そして 刻一刻と美しく色を変える大空の下に 夜が急速に迫ってきた。 右手に続く台地左手にはチャドへ続く大サバンナが広がる北辺の町ンデレを目ざして 2台の調査用車はまるで物の怪につかれたように走り続けた。 午後6時 闇に閉ざされようとするンデレに無事到着した。 ボツサンゴアを出発して以来はじめてみる電燈の光がやけにまぶしい。

県知事のナド・アベル氏とは クランベルの郡役所で一度逢っているのだから 既に顔なじみである。 前県知事のピエール氏と代ったばかりのアベル氏は 40才前後だが 落着いた態度と話しぶりには やはりこの地位につく人らしい何かがかうかがわれる。

中生層の台地を背後に控え 雄大なサバンナを見下ろす小高い丘の頂に建っている県知事邸は ンデレでは最



第4図 バミンギ南方の国道8号線で故障した調査用車 この付近は大型動物の密集地帯である

上の場所にある。広いベランダを吹き抜ける冷んやりとしたさわやかな風。今にもこぼれ落ちてきそうな大粒の無数の星。ふんわりとしたソファに腰をおろしたとたんに、全身から力が抜けてゆくようなだるさを感じた。

久しぶりに見た電燈も町の中心のごく一部だけにしか灯っていない。町のたたずまいは分らない。点々と燃える焚火を見ながら町中を走り、橋を渡って宿舎に着いた。この宿舎はどうやら町はずれともいえないような場所にあるらしく、期待していた電燈はなかった。

真暗な宿舎の片隅で異様な臭のする水で汗を流し、夕食の招待を受けて県知事邸へ向ったものの、先客の姿を見て少々驚いた。知事をはじめ招待客の軍楽隊の指揮官、陸軍中尉殿、商工会議所のお偉方、そのほか数名の来客の皆がきちんとした服装をしているのに、当方の身なりはまったくみじめだ。洗いたてではあるが折目のない作業ズボンに色もののオープンシャツ、それにゴムズリーといういでたちは、とても主賓たる者の服装とは縁遠いものである。しかし、この調査旅行に出発する前には、旅先でこういうことがあるとは予想もなかった。このみじめな姿も止むを得ない。だが、下着を含めて身につけている物すべてが洗濯したてであるということで、私は別にひげめを感じなかった。この場合は、単なる旅行者ではないということで、勘弁してもらおうほかはない。

ビール、ウイスキー、ワイン、ジュースなどと一緒に手造りのビスケットが運ばれて、食事前の酒宴がにぎやかに進んだ。話上手で聞上手なこの国の人たちの大仰なゼスチャー、たっぷりの語らいは実に愉快でにぎやかである。

グラス1杯のビールで金時の火事見舞のようになった私の顔を見て、知事も多くの来客も、腹をかかえ、涙を流して笑いこけた。恐らく、酒に飲まれた私の顔がこの人たちにとって最高のアピタイザーになったことは間違いない。それにしても、酒をいくら飲んでも顔に出ないこの人たちは、私などにくらべて、大ぶ得であることは確かだ。

下痢が完全には治りきっていない腹には力がないし、痔の痛みも治まってはいない。後の苦痛を思うと、食べることを大幅に控えたのだが、大いに飲み、大いに食べ、そして大いに語ることがホストに対する客としての礼儀らしいので、なるべく食べるようにした。スパゲティと卵のグラタン風の料理、挽肉を主としたパイ骨付きのマトン、ビーフステーキ、鶏の唐揚げ、焼飯、白

飯、マニオク、ミックスサラダ、デザートはナツメヤシにオレンジ、マンゴ、パパイヤ、バナナである。久しぶりに食べる実に美味しい家庭料理に夜の更けるのを忘れかけてはいたが、強烈な下痢で弱っていた内臓は、暑い最中の長旅の疲れもあってか、やはりこれらの御馳走を満足に受付けてはくれなかった。

少しづつ腹具合がおかしくなってきた。そして冷んやりとした夜風になぶられて、気持が良いはずの身体は次第に熱気をおび、額には油汗が吹き出てきた。旅の途中も、ここへ来てからも、我慢してきたが、とうとうその限界がきたらしい。しきりに引留めてくれる県知事と来客に厚く礼を述べ、仕事が残っていることを口実に、宿舎へ車をとばした。そして宿舎へ着いたとたんに、トイレへ駆け込んだ。広さ3.3m<sup>2</sup>ぐらいのトイレは、もちろん真暗である。すぐ近くでガサツガサツと音がする。ポケットライトの弱々しい光の中に、無数のゴキブリとトカゲが浮んだ。害する生物ではないが、あまり気持の良いものではない。腹の中はどうやら空っぽになったらしい。これでしばらくは大丈夫だが、痔の痛みにはまた泣かされた。

真暗な宿舎の軒先に置いてある食糧箱に腰を下ろして、ポケットライトの灯を頼りに、一日のメモを書きはじめたが、二重三重に見える字がまともな形に書けているかどうかは分らない。私の目は、ツエツエ蠅に血を吸われて三日目の夜から、突然、乱視状態になっていた。

## ンデレにて

ンデレ地区については、花崗岩とこれを不整合におおう中生層および第三紀層の基底部について、放射能強度測定を行なうことにしていた。チャド共和国へ続く雄大なサバンナ地帯は、ジープで走りまわられるものと予想していたが、完全に当がはずれ、南部地帯のサバンナと同様に、灌木林と呼ぶ方がむしろふさわしいような状況であった(第5図)。国道以外に自動車を通れる道はなく、この地区での調査は、結局、足を頼りということになった。

ンデレの東方約18kmの位置に、ムボロ・アビトランガという部落がある。海拔およそ700mの台地上にあるこの部落は、比較的風通しがよく、避暑地のような感じのする部落である。しかし、だからといって、別に感激するほど涼しいわけではなく、陽射しはやはり強い。相変らずココアとパンとの朝食を終えて、ムボロ・アビトランガへ向う。宿舎横の石ころだらけの坂道を登ると、5分ぐらいで、中生層の台地に出る。ここからムボロ・アビトランガまでの道は、かなり荒れては

いるが 真平である。

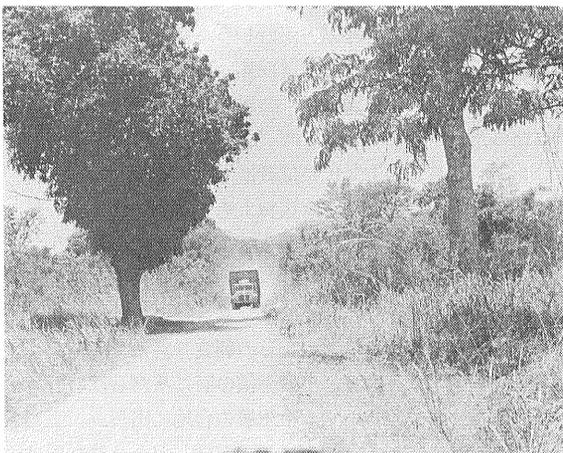
部落の入口付近に車を停めて 東の方へ向って歩いてみる。この付近は中生層の最上部付近に当り 砂岩を主とする中生層はほとんど水平の構造をもって広がっている。ここから丘の斜面を東へ下って チャド盆地の東端部までおよそ10km 歩けば 中生層の基底部と花崗岩とうまくいけばチャド層群の基底部がみられるはずである。ラテライト化作用をほとんどうけていない崖を見る度に放射能強度を測定してみるが 一向に変わりばえせず 車から降りた場所で測定した数値と同じく 2~4 $\mu$ R/H にすぎない。幅50cmばかりの山道を下って行く途中 酒を造っている現場を見つけた(第6図)。しかし 人影はなく 作業は中止されているらしい。山道から少し入った灌木林の中に酒を造る現場があることから察すると どうやら これも密造の現場かもしれない。道は次第に急になり せせらぎの流れが幾分ゆるやかになってきた。砂岩の大きな転石が道を遮っている。そして間もなく 花崗岩の露出が目につくようになってきた。しかし 中生層の基底部を見つけることはできない。ところが 中粒花崗岩の一部で50 $\mu$ R/Hの弱異常がみつかった。数字の上では大したことはないが 少なくとも自然強度の10倍である。

これほど高い放射能強度を示す花崗岩が見つかるうとは予想もしていなかったののでいささか驚ろきもし喜びもし そして 花崗岩をおおう中生層と第三紀チャド層群の基底部で 高放射能異常を発見する期待をひそかに抱いた。しかし 中生層の基底付近と思われる部分の砂岩と礫岩との層互中に 15 $\mu$ R/H程度の微弱異常らしきものが見つかっただけだ。花崗岩地帯に入っしま

うと後はチャド層群の基底部に期待するしかない。だが 1/50万地質図幅を頼りにその境界を知るには あまりにも植生が多すぎる。地形を頼りにチャド層群の分布区域を推定し いささか空しい気持ちで やわらかな土砂を掘ってみることにした。地形は真平である。同行の人夫が ジャングル刀で 必死に掘りはじめた。40cm ばかりの深さに掘った時 一応 放射能強度を測定してみた。その測定値は思ったより高く 30  $\mu$ R/Hを示した。しかし 私たちには 深掘りをする道具もなければ それをンデレで調達することも難かしいのでこの地点に力を集中することはできない。ンデレ付近では期待していた地区の一部ではあるが 今は この正体を突止める手だてではないわけである。

未練がないと云へば嘘になるが 花崗岩までは少なくとも10mはあるこの堆積物を掘り下げることがきわめて困難な今は いさぎよく諦めることだ。

異常にむし暑い谷間の強烈な草いさぎれにむせながら今朝来た道とは谷を隔てたもう一つの山道を帰ることにした。小川を渡って間もなく 人声が聞こえてきた。にぎやかなその声につられて藪をくぐり抜けてみると 10人ばかりの村人がジャングル刀を片手に灌木を切り倒している(第7図)。どうやら畠を広げているらしい。そして 私たちの姿を見かけると 一勢に手を休めて集まってきた。一通り握手してすぐその場を立去るつもりでいたのだが 遠来の客に対する彼等の心づかいはそうしたわがままを許してはくれなかった。小さな木陰に草を敷きつめただけの休息の場には大きな鉄鍋と水汲み用のヒョウタンが置いてある。その鍋の中味は見なくても分っている。彼等が好んで飲む酒の一種で キビを原料にしたドブコクである。しきりにすすめて



第5図 バミンギ付近のサバンナと密林の境界付近 トラックは綿の集荷用



第6図 マニオクを原料とする酒(アリゲ)の製造風景 右側の素焼の釜に粉のマニオクと水を入れて下から熱し アルコール蒸気をパイプで引いて 左側の素焼の器で冷却し アリゲを左側のバ

くれる彼らの好意を無にするのも悪く ほんの一口飲んで礼を云った。しかし 彼らは げげんそうな顔で私を見ては ひそひそと話しはじめた。

話の内容はもちろん分らないが 恐らく 私がほんの一口しか酒は飲まなかったことが話題になったのだろう。彼等にしてみれば 切角差出した酒を飲んでもらえないということは まったく予想もしなかったことだろう。大体 酒を飲めない人間がこの世に居るとは 彼らにはとても考えられないことにちがいない。同行の人夫がパトロンは酒を飲めないと云っているようなので 私はすかさずその後で 「ムビ テンヨウ ンゴウ (私は水を飲みたいんだ)」と云った。この話はうまくつながったらしく 農夫たちは ニコニコ顔で 私のサンゴ語をほめながら 水を出してくれた。

農夫たちを先生にサンゴ語の練習をしている間に 人夫の一人が 大きなバナナの房を担いできた(第8図)。農夫に頼んで売ってもらったらしい。これで4日ばかり家に置くと最高の味になるということだ。それにしても この1房が100フラン(約130円)とは安い。後で教えてみたら この1房のバナナは120本であった。

サバナナ地帯や密林の中を歩くのは本当に疲れる。立派な道でもあれば気分も幾分良からうというものだが道らしい道のない所では尚更だ。

大した登りでもなく また せいぜい12km ぐらいしか歩いていないのに 私の足どりは異常なまでに重かった。日本でならば たとへ山道ではあっても 大した登りがなければ 一日に20km や30km は大した苦痛を感じなくても歩けるのに まったくどうしたことだろう。

その理由はよく分らないが 獣や毒蛇や毒をもつ虫に

対する警戒心による緊張の連続とむし暑さ そして恐らく 野菜の欠乏による栄養面のアンバランスなどがその原因になっているような気がする。

途中で一休みし 喘ぎながら登りつめた台地の木陰には涼風が心地よく吹き渡っていた。12時20分 マンゴの木陰で待つ車に辿り着いたとたん私には 乾ききった土の上に 寝ころんでしまった。

生ぬるいエビアンが喉をくすぐって胃袋にしみこんでゆく。思いきり吐き出した煙草の煙が瞬時に消えた。強い光の中を 痩せこけた老婆が歩いて来る。右手に大きな布袋を提げ 左手を添えている頭上の大きな器にはバナナとマンゴがこぼれ落ちんばかりに入っている。

「ママ テイ ムビ テンヨウ ンゴウ (母さん 水を飲んだら)」

「メルスイ ムツシユウ ムビ タンボラ ビッグウエイ ナンデレ (有難う 私しやナンデレへ行んだよ)」

この国の人たちは歩くことを億劫がらない。もっとも 自家用車もなければ定期バスも走っていない田舎では 歩くことを嫌っていたら生きてゆけないわけだから 誰もがどんな所へでも歩いて行くわけだ。この老婆も重い荷物を頭上に載せてナンデレまで18km を歩き そして それを売った代金で買物をして また18km の道を歩いて帰るに違いない。往復36km の道程は私たちには遠い遠い道程だが この国では決して遠い道程ではない。ングイヤのキャンプを引揚げる折 部落の男がクランペルまで自動車に乗せてくれと頼んだことがあった。クランペルへ何の用事で行くのか聞いてみたら 塩を買うに行くということだった。片道62km われわれの自動車がなければ この男は当然歩くわけだ。日本の山岳地帯に挑む足に自信のある地質家でも この真似は



第7図 ムボロ・アビトランガ西方の谷で開拓する農民 伐採用の刃物はジャングル刀だけである



第8図 人夫が農夫から買ったバナナ 値段は100フランだった

とてもできないだろう。しかも・クランペルからの帰りは 塩や子供への土産を担ぎ 槍や弓矢を手にしての62km である。

私たちは この老婆を車に乗せて インデレへ帰ることにした。老婆は 頭上の荷物を降ろして 1房のパナナを私たちに差出した。それは 老婆の私たちに對する感謝のあらわれではあるが 何となく受取り難い。何といても大事な商品であり 枯れ果てたようなその手に握られたバナナはまだ青かった。

けだるい午後の一時 人夫の一人が 真黒の羊を連れてきた。羊という動物は実に温厚な性質の持主だが 所詮 人間の餌食となる運命の持主でもある。この羊も 宿舎に連れて来られてからおよそ1時間後には 喉を裂かれて死んでしまった。程良く伸びたマンゴの枝に逆さに吊された羊を見ているうちに 一入哀れさを感じはしたが そうした感傷にふける時間は短かかった(第9図)。故障がちの車に手を焼いているこの頃では 獲物を追って遠出をすることもできない。この国の人たちはこうした動物を料理することが余程上手だとみて たった今まで生きていた羊が完全に肉と骨とに分けられるまでには 30分とはかからなかった。

陽が沈み 宿舎にはランプが灯り 金星の美しい輝やきの下では 生暖かい風が吹きはじめた。夕食の仕度を終えたジユル爺さんは 庭先に持出したテーブルに 食器を並べはじめた。ジユル爺さんの云いつけ通り 助手のパスカルが 料理を運んできた。インスタントのポタージュスープ 缶詰の千切り大根 それに羊のモツの煮たものと白飯で 生野菜はない。結構太っていた羊だったので 今夜は美味しいステーキか焼肉の御馳走に違いないと期待していたが その期待は完全に裏切ら



第9図 インデレの宿舎の庭で羊を料理する人夫とコック(右側の半ズボンの人物) 写真中央後方は竹林 中央右の大木の横に見えるのは調理台とガスレンジ

れた。

何故に肉料理を出さないのかそれとなく尋ねてみると この国では 偉い人にモツを出すのが最大の礼儀だという答が返ってきた。まったくつまらない礼儀だとは思いうけれども これは仕方のないことだ。その理由は分らないが もしかしたら モツの方が肉よりも少ないとか あるいは 栄養があるとかいうことかもしれない。かつてサウジ・アラビアで生活していた時 ファイサル王の弟君であるナーセル皇太子に 典型的なアラビア料理である羊の丸蒸焼を御馳走になったことがある。その時私は この料理のゲストコーナーが目玉と脳味噌であると聞かされて 魂消もし そして 吐気さえ覚えた。いくらうまく料理してあるとはいっても 目玉を食べる勇氣はない。だが 斧で頭骸骨を叩き割って取出した脳味噌だけは 仕方なく食べてみた。幾分黄色味をおびたヒダの多い脳味噌の味覚は魚の白子とまったく同じであった。とくに美味くもなければ不味くもないこの脳味噌が何故にゲストコーナーであり また 珍重されるのかよく分らないが もしかしたら やはり 量的にもっとも少ないものほど珍重されるということかもしれない。

異常地を求めて走り廻り そして 歩き回ってはみたものの 心身共に疲れるだけで 期待に答えてくれるものは何一つ見つからなかった。神経は日増しに昂ぶり 考えこむ時間が次第に長くなった或る日 1台の調査用車が 故障で 完全に動かなくなってしまった。怖れていたことがとうとうやってきた。この調査旅行に出発して3日後に この日の来ることを予想して 自動車部品の送付依頼電報を バタンガフオからも クランペルからも そしてインデレからも バンギの鉱山地質局と水森林鉱山省へうったのに 依頼した部品が送られてくるどころか 何の連絡もなかった。残る1台の車に頼って 放射能異常地発見に懸命の努力をしてみるものの 成果は挙げず そして3月2日 ガソリンさえ底をついた。

3月4日 午前4時 アントアンが運転する調査用車はアナトールとジャン・クロードを乗せて ガソリンを購入するために クランペルへ向って出発した。往復680km 400ℓ のガソリンを購入するために消費しなければならないガソリンの量はおよそ130ℓ である。

怖ろしいほどに光る無数の大粒の星の下は 完全に静の世界であると思えるのだが 象をはじめ ほとんどの猛獣は夜行性である。その上 インデレから夜明を迎え

るバミンギ南方の地点までは この国でも屈指の猛獣地帯であるバミンギ・パンゴランの密林とサバンナが続く何かしらの小使銭を与えて見送った車は すさまじいばかりのエンジンの音を残して 暗闇の中に消えた。再び静まり返った宿舎の片隅で 3人の身を案じながらとうとう夜明けを迎えた。

午前7時 県知事専用のランド・ローバーが来た。調査用車のない私たちの窮状を見かねて 貸して下さった車である。夕食に招待された折 県知事から インデレの約 100km 南方にあるマゴウダ部落付近に鉄鉱床があると聞き 磁鉄鉱の良質の試料をみせてもらった私たちは 着任後間もない県知事の開発に対する熱意と私たちに對する御厚意に報いるため 今日 その現場へ行くことにした。

紺碧の空と雄大なサバンナとの間を突走時の気持は実に壮快である。だが マゴウダ部落に着いて 鉄鉱床の所在地を聞いたとたん 気が滅入ってしまった。

私たちが見せられた試料を採取したというこの部落の男の話では 鉄鉱床はこの部落から 50km 東方の山の頂上付近にあるということだ。この国のためにも自分たちのためにも現場へ行って見たいとは思いうけれども どう考えても それは無理である。部落の男たちは 片道に1日あれば十分だし 往復4日もあればゆっくり見て帰って来られるというが 炊事道具や寝具を担いで行くとなると とても1日で行き着ける距離ではない。大した坂もない山道を 20km ばかり歩いてさえ異常なほどに疲れるのに 直線距離で 50km しかも 部落を離れて間もなく道がなくなるというその山の頂上に辿り着くのは 並大抵の苦勞ではない。順調に行っても往復6日 下手をすると10日ぐらいはかかりそうだ。後の日程を考えると その現場へ行って調査をすることはまず無理である。部落の男たちは 明朝6時に出発すれば 明るいうちに現場に着くから行こうと しきりにすすめてくれた。試料と鉱床付近の地質から判断するとそれは明らかに 花崗岩中の岩漿分化鉄床にちがいない。

この国では この種の鉄床に関してはほとんど知られていないし また 記載もないので 是非行って見たいと 日程をいろいろと考えてみたが 結局 時間的に無理であるという結論に達し 計画の実行を断念した。

マゴウダからバミンギまではおよそ 31km である。私たちは まだバミンギ郡長に挨拶していないので バミンギへ行くことにした。その途中 所々に ラテライト化した花崗岩が露出していた。そうした露出を見つけた度に 車から降りて 放射能強度を測定してみる

が 20 $\mu$ R/H 前後でまったく変りばえしない。しかし私は そうした折 珍らしいものを見た。一級国道のど真ん中にも 道から少し入った灌木林の中にも 象の糞が点々と見える。恐らく 夜中に バナナ畠を荒しに来たにちがいない。それを見た瞬間 森の中へ入って行くのが急に怖くなりにはしたが 反面 象に対して可愛いさを感じるとともに この国の自然の豊かさと大らかさのようなものを感じた。

バミンギの町はバミンギ川を見下ろす高台に建つ郡長宅からはじまる(第10図)。大して大きな町ではないが 東側に広がるサバンナと西側のバミンギ・パンゴランの森との間に位置する 実にのどかな町である。町の南端にある郡役所を訪ずれてみたが この役所にも自宅にも 郡長の姿は見当らなかった。

切角来たのにといささかがっかりし また 腹立たしさを感じないではなかったが 郡長の留守は 私たちにとって 久しぶりの幸運であった。というのは 一休みした後 バミンギ川の南岸に見える段丘堆積物の放射能を測定していた折 異常地が見つかったのである(第11図)。

この付近には インデレから南西方へ延びる変動時花崗岩と これをおおって広く分布する段丘堆積物とがあり バミンギ川の両岸には 所々に 段丘堆積物が高さ2~3mの崖をなして露出している。放射能異常は バミンギ橋の下流100m付近の南岸で発見され 最高150 $\mu$ R/Hを示した。自然強度のおよそ30倍である。この放射能異常は 測定値だけを見ると大したものではないが 段丘堆積物中に見出されたという点で重要な意義をもつ。この国では 従来 河床堆積物中にモナザイトやジルコンのような放射性鉱物が方々に発見されているが それらが段丘堆積物中で発見された例はほとんどなく また これほど高い放射能異常も知られてはいない。私たちは インデレ付近での空しさを忘れて 心ゆくまで喜びにひたった。

同行の入夫に最高異常点付近のトレンチングをさせて 再び放射能強度を測定した後 1日の仕事を終えた 午後3時30分 ジュル爺さんが待ちくたびれている宿舎へ帰った。相も変らぬ昼食ではあるが 今日は珍らしく食欲旺盛である。

自動車の都合で2日間をインデレ周辺の調査に費やした翌日 私たちは再びバミンギの異常地へ向った。バミンギ・パンゴランの森の中を走る車に驚いて 猪や鹿やアンチロープが素早く逃げ 猿の群は巨木の天へんに姿を消した。早朝の森の中は 中々にぎやかである。

バミンギに到着してすぐ 郡長のムパイコ氏に挨拶し 人夫はトレンチングに そして私たちはバミンギ川に沿って調査をはじめた。バミンギ橋から下流の段丘堆積物は 総体的に弱異常を示し 所々で 自然強度の10～20倍の異常を示す。サバンナを過ぎると道は絶え 巨木と蔓だけがバミンギ川に沿って廻廊状に茂っている。バミンギ橋の下流 1.3km の地点で 段丘堆積物の放射能強度は自然強度と同じく 4～5 $\mu$ R/Hに下がったが 河床堆積物は 120 $\mu$ R/Hを示した。人夫と2人で厚く堆積した砂利を掘り下げてゆくと 放射能強度は次第に高くなってゆく。しかし 手で掘るのは 60cm ぐらいが限度である。

郡長宅で冷たいビールと水 そして 鶏の丸焼を御馳走になり 午後は バミンギ橋の上流を調査した。しかし 段丘堆積物も河床堆積物も 放射能異常を示してはくれなかった。

川岸に河馬やアンチロープの足跡が無数にある。恐らく バミンギ・バンゴランの森から 闇に乗じて水を飲みに来るのであろう。河馬という動物は 図体だけが大きいだけで まったく阿呆で憶病なものと思っていたが 時折 川岸で遊ぶ人を襲って殺すこともあるという。やはり 野性は むき出しになると 恐ろしい。バミンギの橋から 2km 上流の一部に沼がある。無気味なまでの静寂の中に 水面は波立たず 枯ち果てた巨木と倒木そしてその水面に落ちる影は無気味であり 死の世界を想わせる何かがあるが 暗い水面に浮ぶ大輪の水蓮に似た純白の花は この沼が生きていることを それとなく物語っていた (第12 13図)。

いささか疲れてバミンギへ引返し トレンチでの放射能測定とスケッチをした。高さ 4 mばかりのこの崖は

水面付近から地表下 20cm 付近まで やはり 40～150  $\mu$ R/H の放射能異常を示した。この異常は さらに 南方へ向っても西方へ向っても続くにちがいない。しかし 今の私たちには それを確かめる手だてはない。

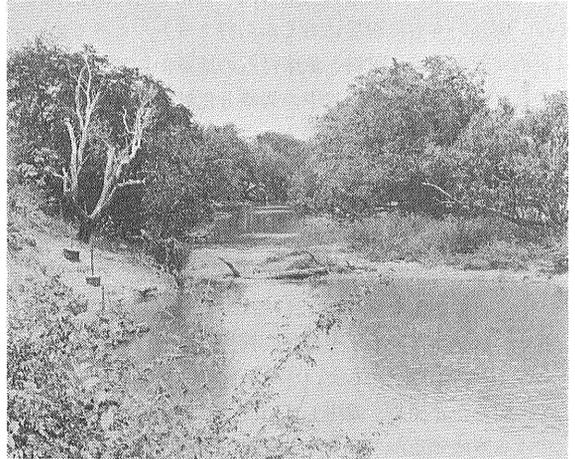
ンデレからバンギへ向う定期バスが来た。そして そのバスには バンギへ部品を取りに行くジャン・クロードが乗っていた。ンデレからバンギまで往復 1,350 km のバスの旅に出るジャン・クロードの苦労は並大底ではなからう。バンギに着いても部品がすぐに手に入るかどうかは分からないし 買物その他で のんびりする暇はないにちがいない。順調にゆけば12日の夕方にはンデレに帰って来るはずである。バスの出発時刻がきた。私たちのこれからの調査旅行が予定通りにゆくかどうかは ジャン・クロードが 必要な部品を持って 12日の夜に帰って来られるかどうかにかかっている。途中の小使銭として 1,500 フランを渡して ジャン・クロードの無事と予定通りの帰着を祈って バスを見送った。

ガソリンの購入が不可能なンデレで 県知事の車を使用させてもらうには 県知事の車の使用予定もあって 限度がある。仕事のこと これから先の旅行のことを考えているうちに 夜中の2時 3時まで寝つけぬ夜が続き 強烈な下痢で痩せていた私の身体は 日を追うにつれて一層細っていった。

ほころびはしないかとさえ思っていた作業ズボンとは ぶつき びっちりしていた時計のバンドと手首との間には 2本の指が入ってなお余るほどの 隙間ができた。バミンギで発見した放射能異常地の調査も ガソリンの欠乏と車の都合がどうしてもつかないために 1ヵ所で



第10図 バミンギ郡長宅 手前のケーブルは 雨期にバミンギ川が増水して橋(中央左)が水没するので フェリーボートを動かすためのもの



第11図 バミンギの放射能異常地付近 放射能異常は左側の立木の向う側で発見された この川では長さ 60cm ぐらいのスズキに似た魚が簡単に釣れる

トレンチを掘っただけで 断念せざるをえなくなった。

クランペルヘガソリンを買いに行った車が 夜更けに帰ってきた。ガソリンは予定通りに手に入ったらしいが そのほかに 車の中には マニオクが50籠入っていた。ふだんはマニオクの粉を使っているのだから 調理したマニオクをこんなに大量に買ってくるとは不思議だ。

だが その理由はすぐに分った。彼等は このマニオクを 自分たちが食べるためにではなく 売るために買ってきたのだ。そして 翌朝早く 50籠のマニオクは 宿舎横の道傍に並べられ 2日目の午後には 全部売切れた(第14図)。彼等は 最後の1籠を売り終って小踊りして喜こんだ。仕入れ価格が1籠65円 それを130円で売ったのだから 彼等が喜こぶのは当たり前だ。クランペルとンデレとでは 主食の価格がこれほど変るとは思いもよらなかった。彼等の商才は賞められるべきかもしれない。しかし 日本製の100円の歯ブラシがンデレで65円で売られているのは どういうわけだろう。

残る1台の車も遂に動かなくなった。起動力をまったく失った私たちは 足でかせげる範囲の調査を行なうほかに方法がなく ンデレ周辺を歩くことにした。ココア1杯とパン1片の朝食を終えて 崖をよじ登り谷を越え 露出を求めてサバンナをとぼとぼと歩く。足は次第に重くなってか細い草にさえ足をとられそうになり 息は切れて 口をきくのも億劫になる。ンデレ背後の台地から見下ろすと 花崗岩と中生層とチャド層群の分布が地形的に容易に区別できるのに その場に行ってみると 花崗岩とチャド層群との境界はまったく分らない(第15図)。県知事邸での夕食後の一時「放射能異常が見つかったら この邸の下を掘るかもしれない」と 県知事に言った折 県知事は 「是非そうして

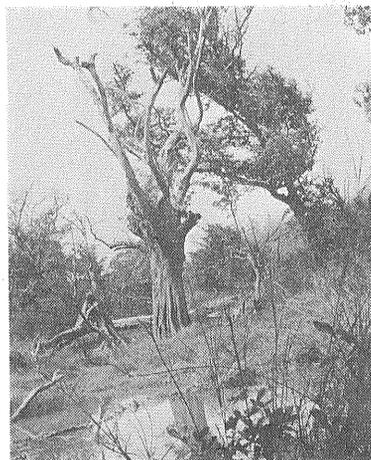
下さい」と 快活に笑われた。これは至極ありふれた冗談に思えるが 着任早々の県知事にしてみれば 本心かもしれない。しかし この邸の下を掘る日はやってはこなかった。

サバンナを歩き 疲れ果てた足をひきずりながら 宿舎へ向った。ンデレの町の近くに 墓がある。そして その墓場には 白ペンキを塗った石造りやコンクリート造りの墓と 土盛りをしただけの墓とがあった(第16図)。キリスト教徒の墓とイスラーム教徒の墓である。

町の中心地にある市場は相変わらず賑わい 綿工場では半裸の男たちが元気に働いている(第17 18図)。市場の中を歩いてみた。そして 不思議なことに気が付いた。それは 野菜を売っている店がないということである。野菜の栽培が行なわれていないわけではないのだが 恐らく それは自家用で 市場に出すほどの収穫がないのであろう。そういえば ンデレへ来てから今日までに手に入れた野菜といえば ビンボン玉ぐらいの大きさのジャガ芋が40個ぐらいだけである。

#### たそがれの古戦場

11日以後はまったく調査不可能になった。歩ける範囲は歩きつくし これ以上は自動車なしではどうしようもない。足をもがれて動きがとれず 来る日も来る日も 宿舎の庭の片隅で考えこんでいる自分の姿は 通りがかりに視線を投げて行く人たちの目に どのように映っただろうか。はじめの頃は道路に向かって木陰の椅子に腰をおろしていた私は 12日の朝からは 道路に背を向けていた。そして 夜がこなければいい 夜が明けなければ少しは救われると 無駄なこととは知りつつ折りながら気持ちのいらだちと戦い自分が哀れでさえあった。



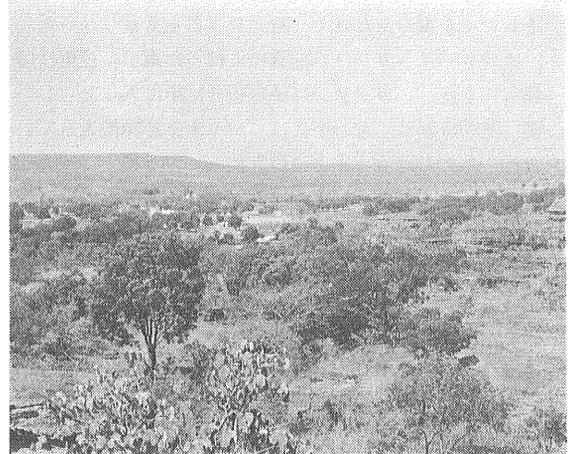
第12図 パミンギ川 上流の沼と樹木



第13図 パミンギ川上流の沼に咲く大輪の花 無気味なまでの沼の静けさの中に純白の肌を惜し気もなく見せて一きわ美しく映っていた



第14図 宿舎横の道路で同行の連中が売ったマニオク 1籠130円だが仕入れ価格は65円 輸送費は無料 税金もかからない。



第15図 インデレ展望 中生層台地から見下ろすインデレは 県庁所在地とはとても思えないほど静かでゆったりとしたたずまいを見せている。右側の崖と前方左の台地は中生層の砂岩と礫岩とからなり 台地の右側に 低くうねる丘は 先カンブリア時代の変動時花崗岩体 平原のサバンナ地帯は第三系チャド層群が分布するチャド盆地の南縁部である。

12日の夜遅くとも7時頃には着くはずのバンギからのバスは 10時を過ぎても着かなかった。今日もうバスは来ないと諦めてベッドに横たわってはみたものの

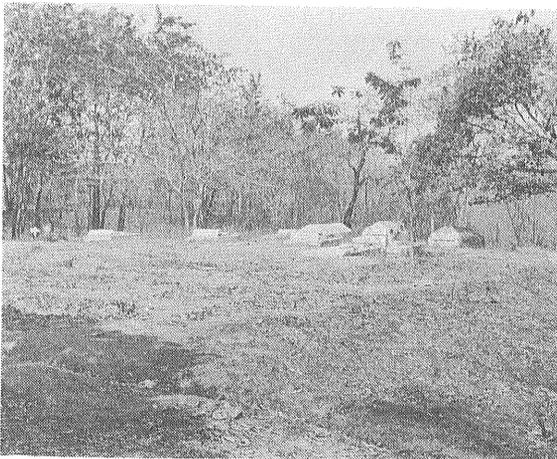
「事故が起ったのではなかろうか ジャン・クロードは無事だろうか」と 悪夢をみる心地で考えこむうちに寝つけなくなり ソーッとドアを開けて 庭へ出てみた。

いつもは恐ろしいほどに美しい光を投げかけている星はか細く なま暖かい風が強く吹きつけている。真暗闇の午前2時 工具箱に腰を下ろして 砂粒を含んだ強風になぶられながら 1時間ばかり待ってはみたが 遂に 車の音は聞こえなかった。

13日午前7時 ジャン・クロードは 自動車の部品と手紙とを持って 元気に帰って来た。バンギ出発が遅れたために インデレ着も遅れたらしい。石ころだらけ

の 1,350km の道を貨客混載のバスで旅するだけでも大変なのに バンギ到着後のジャン・クロードは まったく休む間もなく 部品の入手に走り廻ったという。私は 自分と苦勞を分かち合っているこの若者のそうした姿を想って バンギの役所の責任者に対して 少なからず腹を立てた。しかし ジャン・クロードの話をよく聞いてみると 役所の責任者に対して腹を立て あるいは不信心を抱くことは 見当違いであった。これまで何回も打った電報が バンギの役所には 1通も届いていなかったのである。

ジャン・クロードが持って来た私たちへの手紙は 鉱山地質局長のバクポーマ氏がことづけてくれたものであ



第16図 インデレ近郊の墓地 白ペンキを塗った石やコンクリート造りの墓はキリスト教徒の墓 手前の土盛りをしたものはイスラーム教徒の墓である。



第17図 インデレのほぼ中心にある市場 マンゴの木に囲まれたこの市場は大部分が陽陰になっている 商品の多くは果実・塩・唐辛子・肉の練製などで野菜はほとんどない。

った。その中に 私宛への手紙は 日本から27通 西ドイツから1通 フランスから1通 エチオピアから1通 コロンビアから1通 合計31通入っていた。そして 日本からの手紙の中に 2月17日付の娘からの手紙が1通混っているのを見つけたとたんに 私は 娘が希望する高校の入試に合格したことを直感した。

日本を出発する前 私と娘との間には 入試発表の2月17日までに 私は良い成果を挙げ 娘は希望校に必ず合格するよう お互に全力を尽くすという2人だけの誓が交されていた。その手紙のはじめに「合格」と大きく書かれた文字を見つめているうちに 例えようのない嬉しさを感じた。ングイヤの放射能異常地を発見したのが 2月17日 入試発表も2月17日 そして バンギを出発した私たちがはじめて旅装を解いたボツサンゴアを 経済視察のために ポカッサ大統領が訪問されたのが同じく2月17日 何か因縁めいたものさえ感じられるこの2月17日は 私にとって 生涯忘れることのない1日になりそうである。

調査ができなくなって以後 黄昏れ時になると 私の足は比高100mばかりの岩山へ向うことが多かった(第19図)。この岩山は かつて サルタンが部下と共にフランス軍と戦った 古戦場である。中生代の砂岩と礫岩とからなるこの岩山は 将に 要塞を想わせる自然のきびしいたざまいを見せている。しかし今は 当時の激しかったであろう戦を想い起させるものはこの深くそして不規則にえぐられた岩山以外にはなく 野の花さえも咲いてはいない。

人影は無く 梢を鳴らし 岩肌を叩く風の音は無気味だ。ねぐらへ急ぐのか 時折 小鳥の群が旋風のように視界を遮って行く。怒り狂っていたような太陽は オレンジ色から真紅に身を変えて 今は消然と 限りないサバンナに果ててゆく。浮雲はピンク色に縁どられ 西の空は青白く急変した。ンデレのイスラーム教徒たちは 今 遙かなる聖都メッカに向い 大地にひれ伏して 祈りを捧げていることだろう。太陽を憎み 月を崇める彼らにとって この一瞬は一日の始まりである。とくに目的があつてこの岩山へ登るわけではない。その頂に坐して 西の空をじーっと見つめる自分だけの世界 いつの間にか その静寂な孤独の世界に浸りきって自分がおかれている立場 責務 仕事これから先の調査旅行について考え そしてまた この国の未来像を 過去と現在の姿を通して想い浮べることが多かった。現在の姿は過去の遺産以外の何ものでもない。追われそして鞭打たれながら苦難の道を辿ってきたこの国は 今

過去の姿からはとても想像できないほど 真の独立国として大きく変貌するために 懸命の努力を続けている。その努力がいつみごとに花開くか ほんの一時とはいえ 若者と共に起き伏し 国造りに参加させて戴けた私にとっても重大関心事の一つである。

夜が急に迫ってきた。チャド盆地を埋めつくす大サバンナは 将に深い暗闇の中に閉ざされようとしてはいるが 既に猛獣たちの活動の場となり むしろ 日中よりは賑わっているのではなからうか。垂直に近い岩肌をすべるように降りて 宿舎への山道を急いだ。そそりたつ断崖と深くせまる谷とにはさまれて 辛うじて道らしさをとどめている部分を歩く時には さすがに足がすくみ 細い道を遮る灌木の枝は 鞭のようになつて 頬を叩く。急げば急ぐほど 背後に幽気が迫るような恐さを感じるのは 小心の故だろうか。

丘の麓にささやかに開かれた畠の作物は既にさだかではなく 畠の南を限る小川で洗濯していた乙女の姿はなかった。洗濯板の代りの大木に石鹸の泡が残っているところを見ると 洗濯を終えてまだ間もないのだろう。

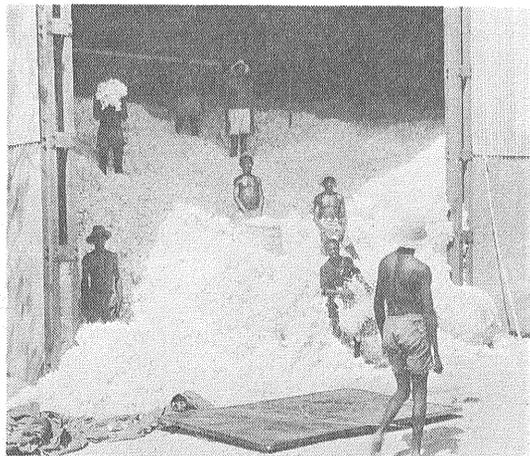
「バラオ モウレンギ ティ ワリ モウ ソコラボンゴ(今日はお嬢さん 洗濯)?」

「バラオ ミンギ ウィ ムツシュウ ムビ ソコラボンゴ(今日は はい 洗濯です)」

「ンゴウ ティ ザパア ア イエ ティ ペカ ケーケラケ(明日は雨かね)」

「ノン」

これだけの会話を交したこの乙女は 赤銅色の肌をはずかしげもなく露わにしていたが 例えようもない女らしさを身につけていた。もちろん その乙女の名も家



第18図 ンデレの綿工場と従業員

も私には分らない。

宿舎にはとっくにランプが灯っていた。庭先に茂るマンゴの枝の向うに金星が輝き 上弦の月は優美な光を投げている。ジュル爺さんのやかましい声に操られて助手のパスカルが 庭にしつらえたアルミ製のテーブルに 夕食を運んでいる。コンソメスープに白飯 そして 大きな皿には アンチロープのステーキが盛られている。デザートはバナナとオレンジの盛合わせであった。夕食後の一時 トランジスターラジオから流れるフォークソングのメロディにのって ジュル爺さんとパスカルがダンスをはじめた。この国の人たちは天性の音楽家であり また 踊り手であるらしく そのリズム感は抜群である。

自動車の部品が届き 修理が順調に進んでいるので 皆もほっとしたのでろう。一しきり歌い そして 踊った後 皆は町へ出かけて行った。

夜中の何時頃か 「パトロン パトロン」と呼ぶパトウカーの声で 起された。こんなことは旅行に出るからはじめてだ。余程のことがなければ寝ているパトロンをわざわざ起すはずがない。聞くと ジュル爺さんが急病で重態だという。私は とび起きて ジュル爺さんが寝ている部屋へ行って見た。土間に寝ている爺さんは 身体を海老のように折り曲げて 額から油汗をたらしてうなっていた。その側では 同室の3人が 心配気に見守っていた。特に変わった病気でなければ 日頃薬になじみの少ない人たちが発病したばあいにもっとも有効なのは 精神的に暗示をかけて この薬を飲めば絶対に治ると信じさせることである。ただし 自然のままに生きている人たちの体調はきわめて敏感なので 特効薬を用いると思わぬ事態を招くことがあるから ご

くありふれた副作用のない薬を用いるのが素人療法のコツである。

ジュル爺さんの身体を真直ぐに仰向けにして まず熱がないことを確かめた後 脈膊をはかり 手の平で 静かに 胃から腸の部分を押してみた。胃を押すと 爺さんはものすごく痛がった。

酒の飲み過ぎによる急性胃炎と判断した私は おもむろに ガーゼに水を浸して額から顔 胸 腹 手と足などを静かに拭き終えた後 ふだん常用されている胃薬を1錠飲ませ それから2分後にもう1錠飲ませて 「夜が明ける6時頃には完全に治る。ただし よくねむることが条件だ」と 爺さんに告げて 自分が使っているエアーマットを敷いた上に寝かせた。

午前6時20分 爺さんのことがいささか気になって すぐに表へ出てみた。マンゴの木蔭では 既に ジュル爺さんが朝食の仕度をしていた。

「パラオ モウ イイキ ンジョニ パパ(お早ようどうだい お父っあん)」

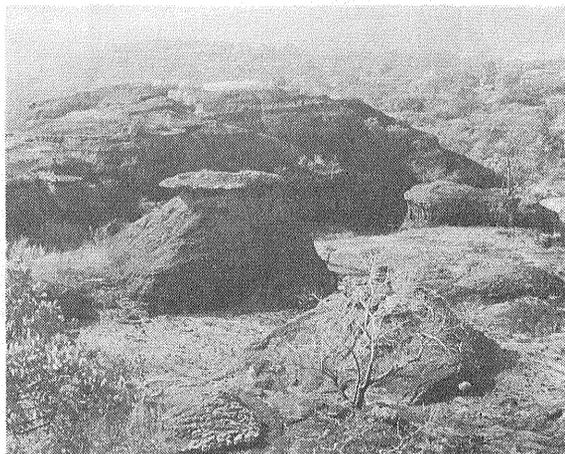
「パラオ ミンギイ ムビ ンガンゴ メルスイ パトロン (お早うございます。元気一杯です。ありがとうございます パトロン)」

やはり酒の飲み過ぎだったらしい。私の精神医学も 満更捨てたものではない。実は白状すると 私がジュル爺さんに与えた2錠の薬は 日本では家庭の常備薬としてごくふつうに用いられているSという健胃整腸剤でももちろん 正確に2分おきに1錠づつ飲まなければならぬといった大げさなものではない。

「鯛の頭も信心から」とか 「信ずる者は救われる」とか よく言われるが こうした場合にも複雑な人間社会においても お互に信じ合うということが生きるための根本原則であることに間違いはなさそうである。

私は ジュル爺さんに 深酒しないように強く注意し そして 「特効薬はもうない」と 付け加えることを忘れなかった。ジュル爺さんも 胃の激しい痛みにこりたのか あるいは もう治してもらえないと思ったのか これ以後バンギへ帰り着くまで 深酒を止めたようだ。

3月17日午前10時 自動車の修理は完了した。この時は 羽根をもがれた小鳥のように 思いのままに動くことができなくてやるせない日を送っていた私が待ちこがれていた時ではあったが 県知事御夫妻の心づかいと 積極的な御援助とを戴きながらも それに報いることができなかった私の心は暗かった。自動車の故障で止むを得なかったと割切ろうとしても 簡単には割切れない



第19図 インデレの背後にひろがる中生層の台地 深く不規則にえぐられたこの岩山は かつてこの地のサルタン軍とフランス軍とが激しい戦いを展開した古戦場である。

心のわだかまりがある。「今度来た時には 邸の下を掘って下さい」という県知事の慰めの言葉さえ 私の胸には 鋭い錐のように突きさった。

しかし そうした切なさや心のわだかまりを癒やしてくれるものがまったくなかったわけではない。それはンデレの人々の優しい心づかいとバミンギ川の岸で発見した放射能異常 そして 深く不規則にえぐられた岩山とチャド平原の大サバンナとが織りなすみごとな天然の美であった。

ンデレから北端の町ピラオへ移動し 現在この国でも つとも期待されているンガデ銅鉱床の概査を行なうこと

はこの調査旅行の目的の一つであった。そして、自動車の修理が完了するまで これを予定通りに実行するか割愛するかで頭を悩ました。その結果 予定移動日に既に11日も過ぎていて ビラオでガソリンを購入することがきわめて困難であること ビラオまで400kmの道中で自動車が再び故障する可能性があることなどの理由で この計画の実行を断念することに決定した。

ンデレ最後の夜 鶏の丸焼をはじめ数々の手料理を作って来てくれたお嬢さんもあり 名残りを惜しんで訪ずれる人たちが 宿舎は遅くまでにぎわい 眠りについた時には 既に2時を過ぎていた。

(筆者は 鉱床部)



地 学 と 切 手



コンゴの鉱物切手

P. Q.

1970年3月20日に発行された コンゴ人民共和国(ブラザビル)の多色刷航空切手2種である。他のひとつのコンゴ(キンシャサ)は旧ベルギー植民地であり 最近ではザイルと改名した。こちらのコンゴ(ブラザビル)は旧仏領であり 1958年に自治共和国となったが外交はフランスに委ねられていた。しかし 1960年にはフランス共同体内の独立国となった。コンゴ川の西岸に位置し 34万2千km<sup>2</sup>の面積に約100万人が住んでいるが 国土の半分は熱帯林によって覆われている。コンゴには 15世紀末にポルトガル人がやって来たのが端初であるが フランス領となったのは1880年にフランスの海軍士官ブラザがやって来 ベルギーとコンゴ河の兩岸をめぐって領土獲得競争をしたことによる。首都ブラザビルの名は彼に由来している。

この国の鉱産物として1969年の統計は以下の通り。

カリ	205,000トン	
原油	24,215トン	
鉛亜鉛鉱	2,273トン	
銅 鉱	31トン	「仏語圏」アフリカ・マ
金	122トン	「ダガスカル年鑑」71年版

カリ カリ鉱はこの国最大の鉱産物であり 世界でも有数の埋蔵鉱量を保有している。鉱床は二畳系の岩塩層であり 採掘にあたっている コンゴ・カリ会社は この国第1の近代設備を有している。

石 油 内陸地域にあって

先細り傾向を示していた原油は 1969年に海岸沖合 20km 水深60m のところに「海のエメラルド」と名付けた油層を発見したことにより 希望がもてるようになった。1972年には年産200万トンの見通しが得られ 年産500万トンまでの開発計画が立てられている。

鉛・亜鉛 ブラザビル西方120kmのムパサに 鉛・亜鉛鉱床があり 1959年以来開発されているが 1969年には人員の一部を整理した。その後設備を近代化し 低品位鉱も開発可能な体制にし 年産87,000トンを目指している。

Aurichalcite 100F 緑亜鉛鉱  $(Zn Cu)_6(OH)_6(CO)_2$  斜方晶系 硬度1~2 比重3.64 淡緑~緑青~天青色。透明 銅・亜鉛鉱床の酸化帯で二次的に産出

Dioptase 150F 翠銅鉱  $Cu_6Si_6 \cdot 6H_2O$  三方晶系 硬度5 比重3.5 透明~半透明 乾燥地域の銅鉱床の酸化帯に産出